

ベトナムは二〇二〇年までに工業国になることを目指し、工業化・近代化を進めている。二〇〇八年に所得国入りし、二〇一三年一月には人口が九〇〇万人を超えた。路上の市や移動式の飲食店など、昔ながらの風情も残る一方、ファストフードチェーン店の普及、モダンかつ巨大な商業施設の登場など、顕著な変化もみられる。

ベトナムの歩道は生活の場である。路上店も出る、バイクも走る。見上げれば電線の束がある。変わりゆくベトナムの現況の一端を、歩道に立ち、歩くような感覚で読者の皆様にお伝えできたら…。連載のタイトルにはそんな思いを込めた

「？」。若者たちが筆者に定期券をみせて乗車してくる。自分の服装をみると、グレーのシャツに紺色のズボン姿。確かに車掌の服装に似ているが…。

二〇一四年三月まで一年間滞在したハノイ市では、通勤に市バスをよく利用した。黄、白、赤を基調としたバスだ。最近は車体横に派手かつ大きな広告も目立つ。

筆者が利用していた路線のバス運賃は、五〇〇ドンだった。価格的には小袋入りのスナック菓子ぐらいの値段である。ちなみに定期券（一月）には二種類あり、一路線で九万ドン、全路線使用で一四万ドンであった（二〇一四年五月一日から前記価格はそれぞれ七〇〇〇ドン、一〇万ドン、二〇万ドンに値上げされた）。

バスがバス停に到着すると、乗車口に群がる人たちの後方に連なって車内に乗り込む。縦五センチ、横八センチ超の白もしくは桃色の薄紙（進行方向により色が異なる）に保険付きと書かれた乗車券を車掌から購入する。その際、乗車券の上部を車掌が少し破る。同じ乗車券が複数回使用されるのを防ぐためだ。素朴な工夫が感じられ、この手作業をみるのが筆者は好きだった。

通勤に使用したのは九番バス。ルートがやや複雑であった。例えば帰宅時に使用すると、ベ

トナム社会科学学院前（リュウザイ通り。ダエウホテル方面に直進し、交差点を右折して）↓キムマー通り（動物園を右手にみながらカウザイのバス停を経て左折して）↓ラン道路（トリーック川を右手にみながら走り、途中でUターン。少し進んだ後右折して）↓チュアラン通り（同通りを抜けて右折して）↓グエン・チャー・タイン通り↓（再びラン道路方向に直進し、その手前でUターン。郵便局前を抜けて交差点で右折して）↓フィン・トゥック・ハン通り（そのまま直進して）↓ハノイ放送局前で下車、というルートであった。この間、いくつものバス停が小まめに設置されている。また、不規則な動きをするバイクの群れ、自動車、自転車、通行者の間を縫いながら進む。だから、混み合うと

筆者のベルトを吊り革代わりに掴む人もいた。時間帯によって異なるが、乗車時間は少なくとも四〇分はみておく必要があった。時間的には職場から歩いて帰ると一〇〜一五分程しか変わらない。状況に応じて、百花繚乱の感があるタクシー、徒歩との併用になった所以である。

ただ、市バスには市バスにしかない魅力があった。筆者の利用していた路線の沿線には、グエン・チャイ大学、貿易大学、外交学院（外務省）、法律大学、国家行政学院といった教育機関が多くあった。そのため、通勤客だけでなく、

多くの学生が利用する。また、常連客だけでなく、トゥーレー公園（動物園）に行く家族連れもいた。身体の不自由な人、妊婦、高齢者、幼児が乗車してくると、席を譲る学生の姿をよくみかけた。筆者に声をかけてくれることもあった。

乗車中の過ごし方は人それぞれ。運転手や車掌にしきりに話しかける人、友人同士で話す人、携帯電話で話す人、携帯電話の操作に夢中人、コンピュータを開いて作業をする人、勉強する人、本を読む人、編み物をする人、居眠りする人…。

車掌さんにも色々なタイプがあった。スポーツ刈りで強面。不愛想に客の立ち位置まで仕切る人もいれば、対照的に書生風でこちらが少し心配になるような人も。仕事道具で膨らんだリュックを背負う筆者は、乗車を重ねるうちに車掌ごとの癖を覚え、この車掌の時には立ち位置はここなどと、対応するようになった。

彼らの役割は多様である。乗車券の確保・販売、定期券のチェック、車内の秩序維持、降車駅や乗車ルートに関する乗客からの質問に対する応答は基本である。その他、運転手に頼まれて、ルート途中にある路上茶屋でお茶やチューインガムを買う、時に嘔吐する乗客もいるが、嘔吐の処理（筆者がみた二回とも、赤レンガ色に変色した使用済みの調理用燃料炭を路上で拾い、足で砕いて嘔吐と混ぜ合わせて水分を吸収させるといふやり方だった）も彼らの仕事である。

乗客乗降時の動き出しをもう少しゆっくりしてくれないだろうか。気持ちは未だ一乗客のままである。

（つらもと） みる／アジア経済研究所 在ホーチミン海外調査員

※隔月で掲載いたします。